



チャイニーズティーマスター 小田 純也による
世界 中国茶紀行
Vo1. 10 東方美人 誕生



中国料理 香桃で人気の台湾の銘茶「東方美人」。その愛らしい茶名と香りの良さから、食前茶として、また食事中や食後のデザート時にも親しまれています。

※ ページ内に虫のイラスト・写真が掲載されております。

この東方美人について、誕生、幸運の虫、熟果香と3回に分けてご紹介します。

ポンポン茶 栽培奨励

昭和16年（1941年）8月30日、大正時代初期創立発刊の「台湾之茶業」に「ポンポン茶栽培奨励」という記事が掲載されました。

当時の台湾で飛び交うお茶の呼び名である「ポンフウチャ」という発音が、日本人編集者には「ポンポンチャ」と聞こえたそうです。

後に東方美人と呼ばれるポンフウ茶。一世を風靡するお茶が誕生する様子をイラストを交えながらご紹介いたします。

中華民國台灣省 茶業改良場 教授
故 徐英祥氏との回顧録より

昔々あるところに、お茶作りに熱心な茶農がいました。

彼の茶園では、おかしなことに次から次へと

お茶の葉が枯れていくのです。

まわりの人たちは噂しました。

「彼の茶園は病気にかかった。

着園（ちゃくえん）だ、着園だ。」

牛を引きながら、茶農は「次の芽がでるまで待とう」と枯れた茶葉をムチでバシッバシッと打ちました。

そうしてパラパラと枯れ落ちた葉を孫たちが拾って遊んでいました。



ある日、茶農は枯れた葉を集めて

お茶を作ってみました。

完成したお茶を当時の日本総督府に持っていくことに。

すると、破格の値段で買い取ってくれたのです。

しかし、人々に話しても信じてもらえず「ポンフウ（極風＝ほら吹き of 意）」と呼ばれるばかり。



茶園の病気がまさか虫の仕業とは当時は誰も分からなかったのです。

この香り高いお茶を口にする時、

人々は「園味が良いですね」と口々に言ったそうです。

一世を風靡、香り高い「ほら吹き茶」

右の写真はチャイナドレスを着た女性が、ティーカッププソーサーから耳付きのティーカップを持ち、烏龍茶を楽しむひとときの光景です。



日本統治時代の日本の総督府には、海外からのお客様

の出入りが多く、おもてなしのサロンではこの香り高いお茶を淹れると評判が良かったため、お土産品として用意することもあったそうです。

時には海外の商社にプレゼントされることもあり、お茶の評判は瞬く間に広がりました。

いよいよ海外では高値がつき、これまで特に名前がなかったこのお茶に、海外でも現地でも様々な名称が付くことになったのです。



様々な名称

- イギリスでは東方の美人が摘んだお茶のイメージから「オリエンタルビューティ」
- フランスではシャンパンのように華やかな香りから「シャンピンウーロン」
- 台湾が美しい島と呼ばれていたことから「フォルモサウーロン」
- 現地では茶園に病気がついたと思われたことから「着園茶」

- 台湾・苗栗県では客家の表現で「ほら吹き」を意味する「槿風茶」
- 台湾北部の現在の文山地方では福建系の人の表現で「膨風茶（＝ほら吹き）」
- ウンカ（昆虫）が好む新芽の白い産毛の外観から「白毫（はくごう）烏龍茶」
- 完成した茶葉の色合いから「五色茶」
- 北部の坪林地方のお茶屋さんでよく使われる商品名で「白毛猴（はくもうこう）茶」
- 政府高官が茶産地の苗栗県を視察の際に名付けた「福寿茶」
- 欧州向けのお茶という認識から「番庄茶」

これだけ沢山の名前があるだけでも、このお茶が世界に広がり、人気を博していたことがわかります。

ポンフウ（＝ほら吹き）呼ばわりされながらも、瞬間に一世を風靡したポンフウ茶。その立役者、新芽に潜む「幸運の虫」について Vol. 11 にてご紹介いたします。



撮影：小田 純也

中国料理 香桃

レストランのご予約・お問い合わせ

TEL 06-6343-7020 (直通)

営業時間 10:00 a.m. ~ 7:00 p.m.

rc.osarz.restaurant.rsv@ritzcarlton.com

ザ・リッツ・カールトン大阪

〒530-0001 大阪市北区梅田2丁目5番25号